様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２４０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１６８

研究課題名（和文）騙し絵と遠近法箱にみる１７世紀オランダの視覚レトリックについて

研究課題名（英文）On the Visual Rhetoric of Trompe-l'oeil and the Perspective Box in the 17th-Century Netherlands

研究代表者
柿田　秀樹（Hideki, Kakita）

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号：１０３０６４８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、コミュニケーション学、とりわけレトリック研究の視点から、騙し絵と遠近法箱という具体的な視覚文化に焦点を絞り、そこに介在するレトリックの力を考察した。とりわけ、オランダとイギリスで１７世紀に活躍したサミュエル・ファン・ホーホストラーテンを中心に、彼の絵画論とアナモルフォーズ、そしてレトリックに関する文献調査と共に騙し絵と遠近法箱の作品を分析した。西欧絵画に内在するアナモルフォーズ（と遠近法）に焦点を当て、その歴史的変遷と視覚レトリックの文化的力について批判的に考察した。

研究成果の概要（英文）：From the viewpoint of communication studies, especially a rhetorical perspective, this project investigated the power of visual rhetoric by focusing on trompe-l'oeil and the perspective box as specific representations of visual culture. While this research project broadly examined trompe-l'oeil and the perspective box, it narrowed its investigation on the works of Samuel van Hoogstraten, who was active in the Netherlands and the UK in the 17th century. In addition to analyzing his perspective box and trompe-l'oeil paintings, this study analyzed with his texts on art theory, anamorphosis, and rhetoric. Focusing on the emergence of anamorphosis (and perspective) in the Western paintings, this study critically examined its historical transformation and the cultural power of rhetoric in the visual material.

研究分野：レトリック理論

キーワード：視覚レトリック　遠近法箱　騙し絵　サミュエル・ファン・ホーホストラーテン　視覚文化　アナモルフォーズ　潜在的なもの　投影

１．研究開始当初の背景

２０世紀末にW. J. T. ミッチェルによって宣言された言語論的転回に代わる視覚論的転回は、人文諸科学を巻き込んだ視覚文化論という領域横断的な研究領域を新たに生み出した。80 年代に米国で台頭したこの領野は、絵画芸術を中核とする美術（史）の分野に加えて、比較文学やメディア論、コミュニケーション学等の隣接領域を包含しつつ、視覚表象一般を文化的対象として扱いうる研究領域として認知され、高い学術生産性を保ちつつ、その領域画定は進行中でもある。

コミュニケーション学の分野でも視覚への注目は９０年代以降で著しく、コミュニケーション学の理論的屋台骨としてのレトリック理論でも視覚題材を分析する論文が発表されるようになる。その一方で、視覚レトリック研究では、視覚そのものの自明性と視覚文化への批判は未だ不十分でもあり、視覚論への貢献は制限されていた。また、歴史的な題材、とりわけ絵画芸術の視覚レトリック分析については、一定の洞察を導出するような視覚レトリック研究は乏しいのが実情であった。

なお、本研究を始める時点では、騙し絵や遠近法箱などの視覚技術の様態に関するレトリック論、コミュニケーション論、芸術論、現代思想、表象文化論、メディア論を踏まえた総合的な研究は試みられていなかった。

２．研究の目的

本研究では、海外における既存の研究成果を踏まえつつ、歴史的な視覚的題材である絵画のレトリック性を考察するための視座を確立し、新たなレトリック研究の可能性を視覚論の分野に広げていくことを目的とした。騙し絵（*trompe-l'œil*）という本来的に視覚的なレトリックの題材と遠近法箱（perspective box or peepshow）という視覚技術を対象としつつ、絵画のレトリック性を現代的な視覚の問題として解明しうる歴史的な視点を獲得し、レトリック論を視覚文化研究の為の理論的な次元に高めることが本研究の目的となる。

本研究は主として１７世紀オランダの騙し絵と遠近法箱をレトリックという観点から領域横断的に捉えなおそうとするものである。ここで問題となるのは、騙し絵作品それ自体が騙すというレトリック行為であるという意味ばかりではない。作品が当時の視覚の歴史的痕跡であること。様々な視覚・光学的装置が横断した痕跡があること。そしてその技術的無意識があることなども重要なテーマとなる。作品は作家の生産物ではあるが、その公的側面に焦点をあてる視覚のレトリック研究では、一定空間のなかで流通しメディア化した作品内外を切り結ぶ、作品を取り巻く多層な文脈との混交にも注目して、レトリックの果たす役割を歴史的かつ理論的に解明することを目指すものであった。

とりわけ、視覚論とレトリック研究で注目される西洋文化にみられる視覚中心主義の問題に対峙し、それらの歴史性を紐解く鍵として、最も明快に視覚の技術性を示す１７世紀オランダの騙し絵と遠近法箱を取り上げて、それらのアナモルフォーズ構造を考察した。それによって、遠近法という視覚コミュニケーション技術のイデオロギー性を歴史的に批判・考察した。

３．研究の方法

本研究の方法は大きく以下の４つの要素から構成される。

（１）作品調査と文献収集、および作品の個別研究と解釈。関係する美術館などに所属される非公開資料の閲覧。これらには海外調査（オランダ、イギリス、アメリカ等）も含まれる。

（２）遠近法箱及び騙し絵をめぐる美学・芸術学の思想、美術史の方法論、芸術批評、科学的言説の批判的な洗い直しと再解釈をする。

（３）騙し絵と遠近法箱を分析するにあたり、視覚のレトリック理論を新たな志向性で考察するための諸理論の文献を研究・解釈する。

（４）海外で当該分野の著名な研究者の元に赴き、作品と文献読解を深める補助として対話を行う。

４．研究成果

（１）１７世紀における騙し絵および遠近法の知の歴史的考察:１７世紀の騙し絵およびその画家を中心に資料を収集し、その視覚の様態を析出した。とりわけ、サミュエル・ファン・ホーホストラーテンや C. N. ヘイスブレヒツなどの騙し絵画家に着目した。ファン・ホーホストラーテンが残した作品には遠近法箱だけでなく、多くの騙し絵も含まれている。さらに、彼が著した『高等絵画術入門（*Inleyding tot de Hooge Schoole der Schilderkonst*）』（1678）はオランダで数少ない芸術理論として貴重な価値を持つ。マイナーな画家であるはずの彼だが、近年、美術史家だけでなく理論家にも注目され、ファン・ホーホストラーテン研究が盛んになっている。彼の著書には遠近法箱についての直接的言及もあり、遠近法の章も含めて、当時の史料としての価値も持つ。ファン・ホーホストラーテンが提唱した「遠近法の科学」がいかなる知であったのか考察し、その応用としての遠近法箱が構成する視覚の投影が潜在的なものとして生成されることを明らかにした（図書３）。現存する６台の遠近法箱について資料収集を行い、騙し絵と共通した文化的受容のありかたについて検討を行った。カレル・ヴァン・マンデルの『北方画家列伝（*Schilder-Boeck*）』をはじめ、遠近法の新たな展開が１７世紀のオランダであったこと、その流れを主導した印刷物がハンス・ブレデマン・デ・フリースの『遠近法』であったこと、その文化的受容は欧州全域にわたっていたことなどが明らかになった（2014年度）。また、そのうえで１７世紀の騙し絵の技術論的価値（逆遠近法としての歪像）を明らかにし、さらにその受容がもたらす身体的変容について議論を行った（論文１、学会発表２）。

（２）美術史における唯物論の考察: ２０１６年に開催された獨協国際フォーラム「＜見える＞を問い直す」にて美術史家・美術理論家キース・モクシーが基調講演として披露した「唯物論的転回」をレトリック理論の視点から再検討し、物の次元をエージェンシーの理論へと転用する必要性を論じた。絵画の物の次元や唯物性が注目される時、主体／対象という次元で語られる問題点を析出し、その二項対立を超えてそれらを連続してみることで可能となる、物の生成の次元にエージェンシーと唯物論の可能性がある点を明らかにした（図書３、2015年度）。

（３）遠近法箱などの視覚・光学機器についての文化的考察:１７世紀におけるレンズやカメラ・オブスクラなどの光学技術について、その文化実践を再検討した。カメラ・オブスクラが投影装置として用いられたなど、元来想定された光学技術の実践から逸脱して使用されたことで新たなメディア性を獲得した歴史的痕跡を見出し、さらなる理論的展開の可能性を提示した。その検討作業の一環として、デイヴィッド・ホックニーが提唱した１５世紀（以降）の暗室箱と鏡やレンズの使用に関する仮説と、それに伴う逆遠近法という概念を身体の運動という枠組みに基づいてメディア論として議論した。（図書２、2016年度）。

（４）生成論における遠近法箱の考察: ２０１６年に開催された獨協国際フォーラム『＜見える＞を問い直す』での報告をまとめた同

書を編集し、「遠近法箱の視覚レトリック――サミュエル・ファン・ホーホストラーテンのアナモルフォーズの科学」を寄稿した。現在、１７世紀オランダの視覚文化論で重視されるケプラーを嚆矢とする光学文化と描写術に位置する騙し絵が、昨今のレトリック論から見てどのような位置に置かれるか、ニュー・アートヒストリーや１７世紀オランダの視覚文化論を批判的に検討した。アルパースやセレステ・ブルサティ、マーティン・ジェイやジョナサン・クレーリーらの議論を検討しながら、光学技術の文化的実践の重要性を指摘した。

他方で、視覚文化論において言及される、光学的実践としての描写術に見られる身体論的次元を、視覚の生成によって論じる視点から批判的に考察した。批判されることの多いスベトラーナ・アルパース（とその継承者ブルサティ）の視覚論を検討し、一方で古典的な遠近法に抗する描写術が持つ視点の複数性、網膜像を眼球による歪んだ感覚認識として論じる点が、視覚が生成される次元を論じる妨げになっている点を指摘した。他方で、精神分析の批判から出発するドゥルージアンによる芸術理論（たとえばブライアン・マッスミ）を検討し、遠近法箱の分析には視覚の生成という視点がより重要となることを考察した（図書１）。

（５）騙し絵とレトリックの時代的考察:レトリックが１７世紀に絵画と結びつくに至った背景として、古代ローマ・レトリックの受容の様態と当時の政治状況とをつきあわせることで連関を明らかにし、こうした結び付きが芸術論でいかなる変容を遂げたかを適宜考察した。ルネサンス以降１７世紀オランダにも受容されたレトリック概念は芸術の問題だけでなく、哲学や光学の言説にも散見され、それが市民論や政治論にも波及することで、レトリックの重要性が高まっていたことが確認された。それはオランダでの市民勢力の台頭や教育の一環としてクィンティリアンなどの古代ローマのレトリックがラテン語教育の教科書として使用されていた点からも推察できる（2014年度、2015年度、2016年度）。

以上（１）から（５）までの議論は現在の視覚文化論を新たにレトリック研究として論じるいくつかの論点を提起している。本研究は、騙し絵という芸術の研究に重要な問題提起をしたのみならず、レトリックと芸術との関係の考察を通して、芸術のレトリック性、ひいては芸術と社会、芸術と政治との関係にも新たな問いを開いている。本研究の成果によって、視覚文化論とコミュニケーション学、そして視覚レトリック研究の新たな展開が招来されることが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
１．Hideki Kakita, “Fine Arts as Visual Argument in Discourse, Technology, and Paintings,” *ISSA (International Society for the Study of Argumentation) Proceedings 2014*, (2014): 690-702.

〔学会発表〕（計　2　件）
１．柿田秀樹「表象の限界としての近代――身体の潜在性――」日本コミュニケーション学会　京都ノートルダム女子大学 2017 年 6 月 3 日

２．Hideki Kakita, “Fine Arts as Visual Argument: The Sense of Vision and Technology,” The 8th Conference of the International Society for the Study of Argumentation, University of Amsterdam, 07/02/2014.

〔図書〕（計　3　件）
１．柿田秀樹「遠近法箱の視覚レトリック――サミュエル・ファン・ホーホストラーテンのアナモルフォーズの科学」柿田秀樹、若森栄樹編『＜見える＞を問い直す』彩流社、（2017）未定

２．柿田秀樹「（暗室）箱の中の手――デイヴィッド・ホックニーの逆遠近法と鏡の投影――」谷島貫太、松本健太郎編『記憶と記録

のメディア論』ナカニシヤ出版、（2017）未定

３．柿田秀樹「唯物論的時間とエージェンシー――視覚文化批判――」松本健太郎編『理論で読むメディア文化』新曜社、（2016）121-141.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
柿田　秀樹　（KAKITA, Hideki）
獨協大学・外国語学部・教授
研究者番号：10306483

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)